

後期ライプニッツと心身結合の問題

— トウルヌミーヌが実体的紐帯に与えた影響について —

三浦 隼暉

1. はじめに

晩年のライプニッツが提出した「実体的紐帯 (vinculum substantiale)」という概念は、最初、化体の問題へのひとつの回答として持ち出されたものであった。その問題においては、カトリックの聖体拝領において、パンがパンの姿を維持したままキリストの肉へと実体変化するという事態を、いかにして説明することができるのかが問われていた。ライプニッツはこの問いに対して、パンの実体性とは、そのパンを構成している諸実体(モノイド)の結合にこそあるのだと考える。この「結合」が入れ替わることによって、パンは同じ構成要素で同じ姿を表現したまま、その実体性に関してのみパンからキリストの肉へと変化するという事態が生じうるのである。このような結合は、1712年2月15日のデ・ボス宛書簡のなかで、ライプニッツによって実体的紐帯と名付けられることとなる。

ところが、1713年8月23日のデ・ボス宛書簡のなかで、ライプニッツは自身の考えを改めることを宣言している。それまで諸実体間の偶有的な結合に置かれていた実体的紐帯を、それ自体で実体的であるようなものとして考え直したのである。

はじめ化体をめぐって提出された概念であった実体的紐帯は、同時に複合実体の存立にも関わるものであったことに注意しなければならない。複数の実体からひとつのキリストの肉という実体を構成するという化体の説明は、より一般的に言えば、単純実体から複合実体をいかにして構成するのかという問題圏に含まれるものとして考えることができる。そしてじっさい、実体的紐帯をめぐって盛んに議論が展開されているデ・ボス宛書簡のうちで、化体の問題と並行的に、あるいはむしろより積極的に複合実体の問題が論じられてもいるのである。

さて、本稿では以上で述べたような実体的紐帯概念の背景にあった問題に着目したい。とりわけ、1704年に受け取ることとなったトウルヌミーヌからの批判がライプニッツの紐帯概念の変更とどのように関わりうるのか、ということが問題

となる。彼の批判は、ライプニッツの予定調和説に基づく心身結合の説明に対して、「実在的で実効的な結合 (une union réelle et effective)」こそが必要であると主張するものであった。予定調和による説明か、実在的な結合による説明か、というこの二択は、ライプニッツ自身が提示した先の変更前の実体的紐帯概念と変更後のそれとに直接には対応するものではない。たしかに、結合としての実体的紐帯は、予定調和説によって説明可能な結合として理解可能である。しかし、トゥルヌミーヌが実在的で実効的な結合という語を用いて主張したことは、1713年のデ・ボス宛書簡でライプニッツが提示した実体としての実体的紐帯概念とは異なり、デカルト主義的な前提を含むものであった。それにもかかわらず、本稿は、最終的にトゥルヌミーヌの主張が変更後の実体的紐帯概念に対応するものであったこと、あるいはそのアイデアの源泉になったもののひとつであったことを明らかにすることを目指す。結論を先取りして言えば、ライプニッツは、トゥルヌミーヌのデカルト主義的な結合を捻じ曲げて理解することで、最終的に、実体としての実体的紐帯概念に対応するものとして焼き直しているのである。トゥルヌミーヌの批判に回答した1706年の時点では、その焼き直しが実体的紐帯の変更に関わると、ライプニッツ自身考えていなかったとしても、その時に宿った種は、1713年に実体的紐帯の改定という形で芽を出すこととなるだろう。

以下では、まずトゥルヌミーヌによる批判の対象となったライプニッツの心身結合に関する見解(第2節)と、それに対する批判(第3節)を確認する。続いて、その批判をライプニッツがどのように理解したのかということと回答のうちから取り出す(第3節続き)。その上で、それがデ・ボス宛書簡のなかで、どのように扱われ、実体的紐帯概念の改定へと結実していったのかを追うこととしよう(第4節)。

2. 『新論』における心身結合の問題

トゥルヌミーヌ(René Joseph de Tournemine, 1661–1739)は、雑誌 *Jesuit journal Mémoires pour l'histoire des sciences et des beaux arts*¹(以下 *Mémoires*)の創刊者として知られるイエズス会士である。本稿にとって重要なのは、彼がライプニッツの心身結合に対する批判を展開したということである。1695年6月27日の『学芸雑誌』に掲載されたライプニッツの小論『実体の本性と実体相互の交渉ならびに心身の結合についての新たな説』(以下『新説』)には、すでにフシェなどによ

る批判が寄せられていたが、同様に1703年にはトゥルヌミーヌからも批判が寄せられた。『魂と身体の結合に関する問題 *Conjectures sur L'union de l'ame et du corps*』(以下『問題』)と題されたライプニッツ批判は、自身の雑誌 *Mémoires* に掲載された²。1706年の早い時期には、ライプニッツはトゥルヌミーヌに対して回答(以下『回答』)を提出し、これが1708年の同雑誌に掲載され、それに対するトゥルヌミーヌからの返答(以下『再問題』)もまた同年の同雑誌に掲載されることとなった³。

これらの論争の焦点は、ライプニッツが『新説』において展開した、予定調和説に基づく心身結合の説明にある。『新説』において、ライプニッツは、実体の一性に関する自らの立場を表明した後、次のように述べている。

こうしたことを確立したからには、港に入れるとばかり思っていた。ところが、魂と身体の結合について省察しようとするに及んで、私は大洋の只中に投げ出されたようなものであった。(GP IV 483)

「こうしたこと」とは、河野が指摘しているように⁴、別の版では「物質の中に於ける形相及び精神の必然性と本性」のことである。ライプニッツは、この箇所までで、一般的な物体における形相の役割を打ち立てたのではあるが、心身問題に関して再び大きな問題に直面することになった。続けて、次のように述べている。

というのも、身体はいかにして魂の中で何事かを引き起こすのか、また、ある被造実体は如何にして他の被造実体と交渉し得るのか、こうしたことを説明できるような手だてがないということに気が付いたからである。(GP IV 483)

ここでライプニッツが提示している心身結合の問題は、魂と身体に対応関係、さらには実体一般の対応関係をめぐるものである。個々の実体である「形而上学的点」(モナド)の一性を強調することは、それらを他の何にも依拠しない存在者にする。それゆえ、実体間の関係が問題になるのは自然なことであろう。後期ライプニッツにとって、魂も身体も同様に(支配的および従属的)モナドであるから、それらを異なる種類の実体とみなす二元論者たちとは立場が異なるのだが、そうだとすると、実体間の対応関係は何らかの仕方で説明されなければならない。

ライプニッツは、先の引用に続けてマルブランシュに対する批判を提示し、自身の立場をそこから区別している。

しかし彼〔デカルト〕の後継者たちは、一般に受け入れられている考え方が容認し難いとするや、われわれが身体の性質を感知するのは物質の動きを機会として、神が魂の内に思惟を生ぜしめたからだと考えた。また逆に、われわれの魂が身体を動かすときには、やはり神が魂に合わせて身体を動かすのだと考えた。運動相互の伝達も彼らには容認し難く思われたので、一方の物体の運動を機会として神がもう一方の物体に運動を与えたのだと考えた。これが機会原因説と言われるものであり、『真理探究論』の著者〔マルブランシュ〕の鮮やかな思想によって、大いにもてはやされたのであった。(GP IV 483)

批判の要点は、マルブランシュのこのような「機械仕掛けの神」を持ち出してすべての影響関係を神に還元することは、奇蹟にすぎるとのことであり、哲学的な説明にならないということにある。というのも、ここで提示されている心身結合のあり方は、一方を機会にして他方に結果を引き起こすという神の介入によって説明されており、現象間に存する「第二原因の秩序」の説明を与えてくれないからである。

自身が心身結合の問題に至った経緯と、機会原因論への批判を提示した後、ライプニッツは自身の立場を次のように表明する。

神はまず初めに魂やそれ以外のすべての実在的一性〔を備えた存在〕を創ったが、その際、魂や実在的一性にはすべてのことがそれ自身にとっての完全な自発性によって自らの根本から生じながら、それでいてそれらは外にある事物と完全な適合性を有していなければならないようにした、という考え方である。(GP IV 484)

先に持ち出された機会原因論においては、外的な現象を機会にして内的感覚が生じるというように、神が介入してきたのであったが、ここでライプニッツはそのような内的感覚は神の介入なしに魂において自発的に生じてくるものだとするのである。こうして、魂は自発的に一つの視点に基づきながら全宇宙を表現し、「いわば魂ごとに別々の世界でおきていることのようにであり、あたかも神と当の魂しか存在していないかのような」(ibid) 事態が生じてくることとなる。つまり、実体間の関係は、実体間に付け足される何かとして理解されるというよりも、すでに設定された関係の総体としての世界そのものを個々の魂が表出することによって与えられるのである。こうして、心身結合の問題についてライプニッツは次のようにまとめている。

宇宙の各実体の間に予め設定された規則的相互関係が、実体相互の交渉と言われるものを産出し、他ならぬ魂と身体¹の結合をもたらすのである。ここから、魂が直接的に現前することによって身体のうち座を占めている仕方が理解できる。ここで、精神が身体の内にあるのは、ちょうど、諸単位の結果としての多の内に単位があるのと同じようなもので、この現前はこれ以上直接的なものとはなり得ないほどである。(GP IV 484-485)

ライプニッツにとって実体間の結合の問題は、予定調和的²な諸実体間の規則的相互関係のうちに見出されることとなる。このような経緯で導き出された結合のあり方に対して、トゥルヌミーヌは批判を加えてゆく。次節で確認しよう。

3. トゥルヌミーヌの批判と「実在的な結合」

『問題』においてトゥルヌミーヌは、まずスコラ学者たちの見解を退ける。彼らの見解によれば、心身結合は、「統一することをその特性とする存在であり、それは物質でも精神でもなく、不可分である何かであり、部分的には質料的で部分的には精神的でもある」(『問題』865) ような何かによって、成し遂げられる。トゥルヌミーヌは、このような実体を皮肉とともに否定している。こうした見解は近世スコラにおける幾らかのイエズス会士がとった立場に近いものであり、同様にイエズス会士であったトゥルヌミーヌにとっても馴染みの深いものであったと考えられる⁶。異なる本質を有する身体と魂とを結び合わせるためには、それら両方に共通の本質を有した何かを考えなければならないと、彼らは考えるのである。とはいえ、そのような都合の良い「何か」の存在を仮定するという点で、それは信じ難いものとして退けられることとなる。

さらに続けて、トゥルヌミーヌはマルブランシュの機会原因論についても簡単に触れたのち、ライプニッツの見解の検討へと移る。彼は、予定調和的な心身結合に対して、ライプニッツ自身もたびたび用いる時計の比喻を援用しながら、次のように批判している。

というのも、結局、対応ないし調和といったものは、統一でも本質的な連結でもないからである。人がふたつの時計の間に想定するような何らかの類似、またそれら関係の正確さが完全であるとき、一方の運動が他方の運動に完全な対称性をもって対応していても、この二つの時計が統一されているとはいえない。(『問題』869-870)

『新説』において、ライブニッツは、身体と魂がそれぞれ自発的に活動し、互いに完全な対称性をもって対応していることをもって、心身結合の説明として十分であると考えていた。だが、ここでトゥルヌミーヌはそのような一致では心身結合には不十分であると批判するのである。個々のモナドに内在的な仕方での外的な結合を説明しようとするライブニッツの予定調和的結合の理論においては、このような批判は乗り越え難いもののように思われる。というのも、それに従う限り、モナド間の関係は観念的なもの以上であることはありえず、個々のモナドの対応や調和といったことを超えて実在的な関係を結ぶことはできないからである。

以上のような批判を展開したのち、トゥルヌミーヌは自らの見解を次のように提示する。

わたしたちは、二つの実体間の調和や対応だけでなく、本質的な繋がりや依存があるということを示す原理を発見しなければならない。任意の法則に依存する道徳的で観念的な結合ではなく、実在的で実効的な結合 (*une union réelle et effective*)、外的ではなく内的な結合、あるいは単に宿ることや利用することの結合ではなく、所有や財産の結合を示す原理が必要なのである。また、同じ街の市民たちや、職人と彼が使用する道具、空間とそれを満たす物体とは異なる仕方で、魂と身体とが結合されているということを示す原理が必要である。要するに、私たちはある身体とある魂の間に、私の魂以外のどれも私の身体を生氣づけることができないほどに、また私の身体以外のどれも私の魂によって生氣づけられえないほどに、自然的で本質的で必然的な結合が存在することを示す原理を必要としているのである。(『問題』870-871)

トゥルヌミーヌが強調するのは「実在的で実効的な結合」である。たしかにライブニッツにとっても心身結合は任意のものではなく、或る従属的モナドたちと或る支配的モナドは神が定めた必然性に基づいて統一されており、単に偶然的な統一というわけではない。しかしながら、その統一はあくまでも、神による予定調和に依拠したものであり、実体相互の「本質的な依存」といった関係とは異なるものである。前節で引用したように「あたかも神と当の魂しか存在していないかのような」(GP IV 484) 事態が、予定調和的結合の帰結だとすれば、トゥルヌミーヌの考える心身結合はそれと相容れないものだといえるだろう。

以上のような実在的な結合について、トゥルヌミーヌはそれが五つの仮定から導き出されるものであると述べている。第一に、身体はその構造 (*la structure*) によってのみ異なっている。第二に、その身体が人間のものであるという限りにお

いて、人間の魂の機能に適した、身体部分・体液・動物精気の配置が存する。第三に、人間の魂は、その魂に当てられている身体の諸部分を含み込むための「自然的力 (la force naturelle)」とともに神によって創造された。第四に、魂はこの自然的力によって動物精気に働きかけ、それを通して他の部分にも働きかける⁷。そして最後に、この自然的力を「動かす力」や「含み込む力」と言い換えることで、そこにこそ心身の結合が存しているのだという結論に到達する。

動かす力 (la force mouvante) あるいはむしろ、次のように言ってもいいのだが、含み込む力 (la force contenante) の関係においてこそ、つまりこの限定、身体へのこの働きにおいてこそ、身体との魂の結合が存しているのだと、私はみなしている。(『問題』 873)

トゥルヌミーヌは以上のような自然的力を仮定することで、心身の間の実在的で実効的な結合が可能であると考え。ここで、トゥルヌミーヌがその力を「自然的」という言葉で規定していることは重要である。というのも、次節でみるように、ここで言われた実在的な結合を、ライプニッツはその『回答』の中で、むしろ「形而上学的」であり「神秘」に属するものであると考えるからである。この相違が、後の彼の哲学に対するトゥルヌミーヌからの影響を、直接的ではないようなものになっているといえる。

4. ライプニッツにおける「形而上学的結合」

本節では『問題』に対するライプニッツの回答を確認してゆく。以下で詳しくみてゆくように、ここにおいてライプニッツはトゥルヌミーヌの見解を、少なからず捻じ曲げて理解しているように思われる。そして、このライプニッツによって理解された限りでのトゥルヌミーヌの実在的な結合が、後の実体的紐帯概念に関わってくることとなる。

さて、この『回答』においても、ライプニッツは『新説』で展開した予定調和説に基づく心身結合の説明を、特に変わりなく支持している。その上で注目すべきは、なぜトゥルヌミーヌが『問題』において主張した実在的な結合に基づく説明を拒絶するのか、という点にある。ライプニッツは次のように述べている。

私の意図は、彼らが永遠的な諸奇跡によって説明することを自然的に (naturellement) 説明することにあつた。私はただ現象を説明することを目指していたのであり、すなわち、魂と身体の間意識的に表象される

(s'appercevoir) 関係についてのみ説明しようとしていた。| 他方、そこに付け加える形而上学的結合 (l'union metaphysique) は現象ではないし、その知解可能な概念が与えられたこともないので、私はその理由を求めることを引き受けなかった。(『回答』489-490)

この箇所にはいくつか重要な点が存している。第一に、ライプニッツ自身の意図が、心身の結合を「自然的に」説明することにあつたと述べている点。第二に、魂と身体の間「意識的に表象される (s'appercevoir)」関係すなわち現象を説明することを目指していたという点。第三に、トゥルヌミーヌが「実在的で実効的な結合」と言っていたものを、「形而上学的結合」という全く異なる語で言い換えている点。このうち、とりわけ第一と第三の点において、トゥルヌミーヌの主張は、ライプニッツのうちで別のものへと変容している。

前節でみたように、トゥルヌミーヌは、自身の結合の根本的な特徴として「自然的な」力を置いていたし、先に引用した箇所では「自然的で本質的で必然的な結合」(『問題』871) という表現を用いていた。対して、彼自身の主張をほとんど無視する形で、ライプニッツはその結合に「形而上学的結合」という名を与えているのである。じっさい、トゥルヌミーヌ自身もこのようなライプニッツの『回答』に対して、『再問題』のなかで次のように反論している。

この結合は、彼が述べたように、形而上学的な観念ではない。身体は、実在的・自然学的に (réellement et physiquement) 魂へと結びつけられているのであり、それは完全に一致している二つの時計が結合されている以上のものである。(『再問題』492-493)

現象においては理解できない形而上学的結合として理解しようとするライプニッツに対して、トゥルヌミーヌはそれを「自然学的に」魂へと結びつく結合であると述べている。こうした反論も虚しく、その後ライプニッツはトゥルヌミーヌの立場を「形而上学的結合」との関連で理解し続けることとなる。1708年にトゥルヌミーヌの『再問題』が *Mémoires* に掲載された翌年のデ・ボス宛書簡のなかでライプニッツは次のように述べている。

ここで私は、魂と有機的の身体の間「実在的で形而上学的な結合があることを否定しません (トゥルヌミーヌに返答した通りです)。この結合のおかげで魂が身体のうちにあるということができのです。しかし、このような結合は現象からは説明できないし、現象に変化を与えることもないので、それが形

相的にいかなるものかということのをこれ以上判明に説明することができません。その結合が対応に関するものであるといえれば十分です。(「デ・ボス宛書簡」1709年4月30日, LDB 124)

ここでは、「実在的で形而上学的な結合」という言い方で、トゥルヌミーヌの述べていた結合が捉え返されている。その結合の存在について否定はしないが、現象からは説明できないという理由で扱わないという態度は『回答』以来一貫したものであるといえる。

まとめておこう。「実在的で実効的な結合」という自然的結合を主張するトゥルヌミーヌの『問題』を受けとったライプニッツは、その主張を「形而上学的結合」という異なる次元のものとして受け取った。そして、トゥルヌミーヌ本人の意図とは異なる仕方で理解された結合概念が、デ・ボス宛書簡においても維持されることとなった。次節では、デ・ボス宛書簡において、ライプニッツがこの形而上学的結合をどのように自身の哲学へ組み込むことになったのか、先行研究を確認しつつ検討する。

5. 実在的結合と実体的紐帯

ライプニッツに対するトゥルヌミーヌの影響について論じた先行研究は大きくふたつの方向に分かれている。以下で見るように、一方で、(1) 『問題』に提示された批判はライプニッツの予定調和的な心身結合の問題に変更を迫るものであったという解釈があり、他方で、(2) そのような影響はなかったとする解釈がある。前者の解釈は、デ・ボス宛書簡の英訳者であるルークとラザフォードによって支持されており、後者の解釈はロッジによって支持されている。ロッジは、ルークとラザフォードの見解を次のようにまとめている。「ルークとラザフォードが主張しているのは、ライプニッツが自身の立場を1706年以降に表明するさいに「物体的実体」の語を続けて使用するの、五段階の枠組みにおいて使用されていたと彼らが提示する意味を緩めた限りにおいてのみだ、ということである⁸」。ここで言われる五段階の枠組みとは、1703年の「デ・フォルダー宛書簡」に見られる図式のことであり、いわば予定調和的な仕方で説明された物体的実体ないし複合実体の説明のことである。ルークとラザフォードは、この予定調和説に基づく説明を「緩める」影響、つまり実在的結合をも含めて考えるように転換させる影響を与えたのがトゥルヌミーヌによる『問題』の提示であったと考えるのである。

これに対して、ロッジの解釈は『問題』とその『回答』以降も、ライプニッツの予定調和説的な複合実体理解は維持されたというものであった。ロッジが正しく指摘しているように、1706年に『回答』を提示した時点で「ライプニッツは、人間も含めた心身の結合を説明するのに予定調和で十分だと考えている一方で、トゥルヌミーヌが要求したように思われる結合の種類の説明を与えることを拒否してもいる⁹」のである。

本稿は、少なくとも『回答』の時期においてライプニッツはトゥルヌミーヌの影響を自らの哲学に反映させようとはしていない、と考える。この点でロッジの解釈に概ね賛同することになる。じっさい、ルークやラザフォードらの解釈は十分な論拠を確保できていない。彼らが依拠するのは、『回答』と同じ1706年に書かれたデ・ボス宛書簡のなかの次の一節である。

私が説明の難しさを見出す統一は、私たちの身体のうち存在する様々な単純実体ないしモナドを私たちに結びつけるものであり、したがって、それらから一つのもので作り出します。しかし、現象が我々に示しているところの連続的なものの紐帯 (*vinculo continui quod phaenomena nobis exhibent*) によって結び付けられるのでない限りは、個別的モナドの存在に付け加えて、新たな存在者を引き起こすことがどのようにしてなのかは、十分に明らかではありません。(LDB 22)

ここで言われる「連続的なものの紐帯」こそ、トゥルヌミーヌが述べた「実在的で実効的な結合」であるとされる。ライプニッツはそれを条件付きではあるにせよ、受け入れているというのである¹⁰。しかし、この論拠は二つの点で割り引いて考える必要がある。第一に、ルークとラザフォードも注記しているように、この一節はまるごとデ・ボスに実際に送られた清書からは削除された箇所だということが、このテキストをライプニッツ自身の正式な立場の表明として理解することを躊躇わせる。第二に、連続的なものの紐帯という語はここにのみ登場するものであり、これ以降の書簡においても、たびたびトゥルヌミーヌの主張する結合は形而上学的なものとして退けられている。こうしたことを考慮するのであれば、少なくとも『回答』の書かれた1706年の時点では、ライプニッツは予定調和説に基づく複合実体や心身結合の説明に留まり続けたと考えるべきであろう。

しかしながら、それにもかかわらず、トゥルヌミーヌの『問題』は後のライプニッツに大きな影響を与えることとなる。この点で、本稿は先に提示したロッジの解釈から離れなければならない。「実在的で実効的な結合」は潜在的な仕方で彼

のうちに残り続け、最終的にその哲学を変容させるだけの力をもつものとして再び現れることになるだろう。その意味で、トゥルヌミーヌの批判はライプニッツに影響を与えたと、最終的に結論されることとなる。

デ・ボス宛書簡で、「実在的で実効的な結合」の言い換えとしてライプニッツが使用した「実在的で形而上学的な結合」という語は、1712年2月15日に実体的紐帯概念が登場した後にライプニッツが使用する「実在的結合 (unio realis)」の語へと結びついてゆく。そのさい、「形而上学的」という語が落とされてしまうという点は、注目に値するだろう。

本稿の冒頭で紹介したように、ライプニッツは実体的紐帯の概念を1713年8月23日の段階で改定し結合的で偶有的な紐帯概念から、実在的で実体的な紐帯概念を使用するようになってゆくのであった。その変更後の紐帯概念に対してトゥルヌミーヌが影響を与えたとすれば、それは彼自身の「実在的で実効的な結合」という自然学的でデカルト主義的な結合によってではないだろう。そうではなくて、ライプニッツが理解した限りでのその結合、すなわち「形而上学的結合」が変更後の紐帯概念に接続されるのである。1715年4月29日のデ・ボス宛書簡においてライプニッツは次のように述べている。

もし現象を実在化する、あるいはむしろ現象を実体化する実在的結合 (Unio Realis) があるとすると、あなた [デ・ボス] は物体そのものにおける変化をもたらすものが何なのかと問うておいでです。私はこう答えます。物体が実体として考えられるなら、それは諸モナドの実在的結合から (ex Unione Reali Monadum) 結果するもの以外ではあり得ないのだから、物体が有する様態もまたそこから結果して、モナドの変化とは対応するであろうし、その限り、一般に教えられていること [化体] も生ずるのです。(LDB 336)

ここでは物的実体ないし複合実体の基礎となっている「諸モナドの実在的結合」が、そこに生じてくるさまざまな様態の基礎でもあることが述べられている。もはや諸モナドから構成される複合実体や心身結合は、単に予定調和的な仕方ですべて「対応」することにとどまるものではない。それまで、形而上学的であるがゆえに、積極的なコミットメントを控えられていた実在的結合がここにおいて積極的なものへと転化されているのである。このことは、トゥルヌミーヌに帰されていた「実在的で形而上学的な結合」が、「実在的結合」としてライプニッツ自身の概念として焼き直して利用されているということの意味している。

このような実在的結合は、1713年に変更された後のそれ自体で実在的なものとして理解された実体的紐帯概念に重なるものであると言えよう。先の引用と同じ段落の後半では「実在的な紐帯 (vinculum Reale)」(ibid, 強調は引用者による) と言い換えられていることも注目に値する。ここで実在的結合の概念は、「紐帯」系列の言葉に入り込み、ほとんど同一視されうるものとなっているのである。先にも述べた「連続的なものの紐帯」(LDB 22)が結局削除されてしまっていたのに対して、ここでの「実在的な紐帯」はライプニッツによって正式な見解として採用されていると見ることもできるだろう。このように、トゥルヌミーヌとのやり取りから生じてきた実在的結合の概念と、変更後の実体的紐帯概念とは、両者ともに実在的な紐帯へと至ることになり、予定調和的な観念的対応にとどまる結合よりも実質的な結合を表現するものとして、互いに重なり合っているのである。

6. おわりに

さて、本稿ではライプニッツの予定調和説に基づく心身結合の説明に対してトゥルヌミーヌが加えた批判と、それへの応答を確認し、トゥルヌミーヌがどのようにライプニッツ哲学に影響を与えたのかを検討してきた。心身結合の問題との関連では、1709年以降、トゥルヌミーヌの名がデ・ボスとの往復書簡のうちに登場することはなくなる¹¹にもかかわらず、彼がライプニッツにもたらした「実在的で実効的な結合」の概念は、形を変えて晩年の実体的紐帯概念まで流れ込んできていると言えるだろう。しかし、繰り返し注意しておくべきことは、実在的な紐帯概念の源泉となっているものが、トゥルヌミーヌ本人の「実在的で実効的な結合」というよりも、むしろライプニッツが理解した限りでのトゥルヌミーヌの「形而上学的結合」であったということである。このことは、レルケがスピノザの読者としてのライプニッツに関して次のように述べていたことを想起させる。

ライプニッツの思索は意味の表面上での連続的な変化に置かれている。その思考は、全てを自らの固有の中心へ帰着させようとする努力ではなく、自らの固有の中心に至る所にうまく据えるために、他の視点から自らを拡張することへと常に力を尽くすことで、全てを混ぜ合わせ、消化し、同化するのである。¹²

まさにライプニッツによるトゥルヌミーヌ受容は、自らの予定調和説を中心とする哲学を、それとは異質な実在的結合の導入によって拡張する作業に他ならない。

このとき、ライプニッツは、それを「混ぜ合わせ、消化し、同化する」ことができる形に自ら咀嚼する。咀嚼された限りでのトゥルヌミーヌの主張が、相変わらず異質なものとしてライプニッツに立ち現れ、彼の哲学に拡張を迫ることとなる。それはある種の誤読の産物であったが、実体的紐帯の改定を可能なものとする、ひとつの条件でもあったのである¹³。

¹ この雑誌は出版地の名をとって *Mémoires de Trévoux* としても知られている。

² ウールハウスによれば、この批判論文は1703年5月に Trévoux で出版された *Mémoires pour l'histoire des sciences et des beaux arts* に掲載された後、1704年3月の Amsterdam 版に収録された (Cf. WF 248–249)。ライプニッツの反論が « Remarque de Monsieur de Leibniz sur un endroit des Mémoires de Trévoux de mois de mars 1704 » という題目のものであることから、ライプニッツはこの Amsterdam 版を参照したと考えるべきだろう。

³ 『問題』の引用は *Mémoires pour L'histoire des Sciences et des Beaux-art*, 3, 1703 (reprint 1968) の頁数を、また『回答』『再回答』の引用は *Mémoires pour L'histoire des Sciences et des Beaux-art*, 8, 1708 (reprint 1968) の頁数を示す。

⁴ 河野 (1951), p. 75.

⁵ 『新説』において、ここで提示された仮説は「一致の仮説 l'hypothèse des accords」と呼ばれるにとどまるのだが、1696年の『新説の第一解明』においては「予定調和 une harmonie préétablie」という語が使用されている。両者の内実が異なることから、『新説』において提示された説を予定調和説であると理解する。

⁶ 身体と魂、あるいはアリストテレス的な質料と形相を結びつける、イエズス会士たちの仮説に関しては Anfray (2020) において詳しく論じられている。

⁷ Cf. 『問題』 872–873.

⁸ Lodge (2015), p. 109. この引用は、LDB lxxii–lxxix に関するものである。

⁹ Lodge (2015), p. 120.

¹⁰ ルークとラザフォードはこの引用について次のように述べている。「この一節はデ・ボスに送られた書簡の版に見いだされないものではあるが、物的実体の十分な説明としてのモノド複合見解 (M-Composite View) に関するライプニッツの懐疑を証明するものである。もし物的実体があるべきならば、諸モノドの調和的な表象のうえにさらに何らかのものが付け加えられなければならない。ライプニッツは、その余剰を「結合」として特徴づけ、それによって身体の従属的モノドたちを「それらからひとつのものを作り出す」ような魂に結びつけている。彼が問題を組み立てるそのやり方は、彼のトゥルヌミーヌへの応答を想起させるものである」 (LDB lv)。ここで「モノド複合見解」と呼ばれている見解とは、物的実体がモノドのみから構成されていると見るものとされる。

¹¹ ただし、『弁神論』のレビューに関して、その後もトゥルヌミーヌの名が何度か登場している。

¹² Lærke (2008), p. 34.

¹³ 本稿は日本学術振興会科学研究費補助金 (課題番号 20J12083 「後期ライプニッツにおける有機体論を基軸とした物的実体に関する実在論的研究」) による研究成果の一部である。

凡例

丸括弧内は略号。ライプニッツのテキストからの引用に関しては、『形而上学叙説・ライプニッツ―アルノー往復書簡』(平凡社ライブラリー) および『ライプニッツ著作集』(工作舎) 第1期および第2期に邦訳が収録されている場合、それらを参照した。

- Leibniz, G. W., *Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz*, hrsg. von C. I. Gerhardt, Weidman, 1875–1890 (Nachdr., Olms, 1978). (略記: GP 巻数 頁数)
- 『单子論』河野与一訳, 岩波文庫, 1951.
- 『ライプニッツ著作集』全10巻, 下村寅太郎・山本信・中村幸四郎・原亨吾(監修), 工作舎, 1988-1999.
- *Leibniz's 'New System' and Associated Contemporary Texts*, transl. and ed. R. S. Woolhous and R. Francks, Oxford University Press, 1997. [略号 WF]
- « Principium ratiocinandi fundamentale », éd. and transl. J. E. H. Smith and O. Nachtomy, *Machines of Nature and Corporeal Substances in Leibniz* (2011) 187-199. [略号 Smith and Nachtomy]
- *The Yale Leibniz: The Leibniz-DesBosses Correspondence*, Transl. by B. C. Look and D. Rutherford, Yale University Press, 2007. [略号 LDB]
- *The Yale Leibniz; The Leibniz-De Volder Correspondence with selections from the correspondence between Leibniz and Johann Bernoulli*, Transl. P. Lodge, Yale University Press, 2013. [略号 LDV]
- 『形而上学叙説・ライプニッツ―アルノー往復書簡』, 橋本由美子監訳 秋保亘 大矢宗太郎訳, 平凡社ライブラリー, 2013.
- 『ライプニッツ著作集 第II期』全3巻, 酒井潔 佐々木能章(監修), 工作舎, 2015-2018.

文献表

- Anfray, J.-P. (2020), “The unity of composite substance: the scholastic background to the Vinculum Substantiale in Leibniz's Correspondence with Des Bosses,” *VIVARIUM* 58, pp. 219–252.
- Boehm, A. (1962), *Le « vinculum substantiale » chez Leibniz*, Deuxième édition, Vrin.
- Lodge, P. (2015), “Corporeal substances as monadic composites in Leibniz's later philosophy,” A. Nita (Ed.), *Leibniz's Metaphysics and adoption of substantial forms*, pp. 107–124.
- Lærke, M. (2008), *Leibniz Lecteur de Spinoza : La genèse d'une opposition complexe*, Honoré Champion.
- Look, B. (1999), *Leibniz and the 'vinculum substantiale'*, Franz Steiner Verlag Stuttgart.
- (2000), ‘Leibniz and the substance of the vinculum substantiale,’ *Journal of the History of Philosophy* 38, pp. 203–220.
- de Tourmemine, R.-J., « Conjectures sur L'union de l'ame et du corps, » *Mémoires pour L'histoire des Sciences et des Beaux-arts* 3, 1703 (reprint 1968), pp. 864–875.
- 三浦隼暉(2020)「後期ライプニッツにおけるモナドの支配-従属関係について」東京大学哲学研究室編『論集』38, pp. 56-68.